

## 名詞に対する例外的修飾について

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科  
(2008年9月29日受付、2008年11月7日受理)

### 目的

ここでは、英語において名詞を“修飾”しているが、やや特殊と思われる2つの構造を取り上げ、それらがどのような構造的・意味的特徴を持っているかを分析する。その2つとは、次の例に代表されるものである。

(1) Expo '70

(2) A cup of coffee

即ち、「名詞+名詞」型と「a cup of 名詞」型である。また、これらに対応する日本語名詞句の構造も対比して考察する。これらの構造に関して、筆者はこの考察の前まで、前者の例では、前の名詞が後の名詞を修飾するのが原則で、意味的にはそれに反する例になっており、後者の例では、前置詞句が前の名詞を“修飾”する、という原則に反して意味的には a cup of が後方の名詞を修飾している例である、と理解してきた。しかしながら、それぞれの修飾型の中で、外見上同じ構成でありながら、意味的には原則と逆方向の“修飾”関係が成立する場合があることになり、そうであればそのことを可能にしている条件は何かということについて考察することにする。

### [1] さまざまな修飾構造の例とその意味

ここでは、まず、上記2つの名詞句構造を分析するための視点を導入することにする。次に列挙する各形態はそれぞれ構造が異なっているけれども、筆者には似た面があるように思われる。

#### (A) 形容詞を修飾する不定詞

(3) I shall be happy to accept your kind invitation.

(リーダーズ)

下線部分を合わせた箇所では、この構造上の中心は be happy のほうで、to accept ... はそれを修飾する関係にある。しかし、漠然とした言い方ではあるが、機能的、意味的に考えれば、修飾関係は逆転しているように思われる。Be happy の部分を副詞 happily に置き換えた形に近いという意味である。即ち、構造的には前方修飾ではあるが、意味的には必ずしもそうではない、ということである。

#### (B) So that 構文

次に so ... that の形態を見てみよう。

(4) Those ponds are so small that they cannot be shown in your map.

(5) He so handled the matter that he won over his opponents.

下の例に反し、上の例のほうは、日本語で「非常に・・・なので・・・である」という意識で使用されていると考えて間違いはない。しかし、構造上は、下の例と同じで that 以下の部分が so を修飾している。ここでも構造上の修飾と意味上の修飾とが食い違う現象が起きていると考えられる。

#### (C) 「前置詞+名詞+現在分詞」型

(6) Don't speak with your mouth full. (リーダーズ)

構造的には full が your mouth を修飾して、それが名詞句を形成し、全体が前置詞 with に後続している。しかし、意味的には your mouth is full の状態で、という所謂付帯状況を示す文の意味で使用されていて、full は後ろから前を修飾しているというより、むしろ意味的には主語・述語の文のようなものとして述べられていると言えるのではなかろうか。したがって、この場合も、構造とその意味との間に、食い違いが生じていると言える。

## (D) 完了形

次に完了形を見てみることにしよう。

(7) I have finished them.

(8) ? I have them finished.

歴史的には、下の例(8)が上の例(7)のような現在の完了形のもとであったと推測されている。SVOCの形の構造が、haveとfinishedの部分とが接近することにより、一体的な捉えかたがなされるようになったと考えられている。この変化は、新しい意味用法が生じているが、構造的には基本の形態が若干形を変えただけで、やはり、元の構造が保持されている例と考えられる。

英語では、さらに未来を表す用法のbe going toや存在を表すthere is構文など、現在、さまざまな文法、語法形態が存在する。そのどれもが、英語の基本構造から生じてきたものであり、これにより構造説明がなされることが明らかであり、そのことに驚かされる。こういった動詞を含む構造の他にも、ここで取り上げた名詞句において、ある意味で構造と意味の食い違いが生じていることを述べることになる。

以上の例で、構造上の修飾とその構造を言語活動の中で利用しようとするときの意味的、あるいは意識上の修飾関係は、通常とは異なる場合がある。したがって、“構造(統語)的修飾”と、“意味的修飾”という2つの視点を、いわゆる“修飾”と言われていることの分析に導入することが必要である、ということである。

## [2] 名詞に対する修飾の原則

前節で述べた分析の視点を基に考えると、英語で名詞の塊(名詞句)が形成されているとき、その修飾構造の分析においても、構造上の修飾と、意味上の修飾とを区別して考察することに意味がありそうだ、ということになる。この2つの視点から、名詞句中でもここでのテーマである「名詞+名詞」型と「a cup of 名詞」型およびそれに対応する日本語の「名詞+名詞」型と「名詞+『の』+名詞」型を考察することにする。筆者のこれまでの経験から、次の3点をこれら名詞句に対する構造上の原則として設けることが妥当であると考えられる。

(A) 名詞+名詞 : 構造的には前の名詞が後の名詞を修飾する(英語、日本語共通)

(B1) 名詞+前置詞句 : 構造的には後ろの前置詞句が前の名詞を修飾する(英語)

(B2) 名詞+「の」+名詞 : 構造的には「名詞+『の』」の部分が後の名詞を修飾する(日本語)

これらが妥当であると考えられる理由は、圧倒的多数の例がこの原則に従っているから、ということである。一つの構造に対し、ほとんど常に同様(同程度)に2つの理解が可能な場合、それは言語の構造としては明らかに不適切だからである。いつも、どちらであるか判断しなければならない、という負担になるからである。しかしながら、これを原則として設定してみると、一見それに反するよう見えるものが存在することが分かってくるが、それに意味的な考察を加えるとどういう特徴、棲み分けなどがあるか、ということが研究方針になる。

(A)については、日本語にもこの構造が存在し、この原則がほとんどの場合に当てはまっていると考えられる。(B)については、英語と日本語とで形が異なるが、それは英語、日本語の統語法が異なることの結果である。“構造的に修飾している”ということの意味について付け加えると、(A)では後ろの名詞が名詞句全体の性格を決定しているということである。別の言い方をすれば、この名詞句の主要部が後ろの名詞にある、ということ。その意味で前の名詞は後ろの名詞を“意味的にも”限定している、ということが原則である。(B)においても、“構造的に修飾している”というのは、この名詞句(名詞+「の」)全体の主要部が、英語では前、日本語では後ろの名詞にある、ということで、意味的にも同じ修飾関係が成立している場合が原則ということになる。つまり、これらの構造上の原則に対し、意味的な修飾も同じ方向になっているのが原則ということになる。その場合が大多数の使用例となる。

(C) 名詞+名詞 : 意味的には前の名詞が後の名詞を修飾する(英語、日本語共通)

(D1) 名詞+前置詞句 : 意味的には後ろの前置詞句が前の名詞を修飾する(英語)

(D2) 名詞+「の」+名詞 : 意味的には「名詞+『の』」の部分が後の名詞を修飾する(日本語)

筆者にとっては、上記の構造上の修飾関係の原則を基にして英語、日本語を使用したり、分析してきており、それらが原則であることに問題はなく、筆者にとって意味的に例外と思える場合がどうなっているのか突き止めたいわけである。

## [3] 「名詞＋名詞」型

ここでは、次のような名詞句は除外して考察する。

(9) 「遅刻 欠席」は一回もありません。

(10) 「打倒！アメリカ」(ソフトボールの試合の応援で)

即ち、並列的な「名詞＋名詞」型や音調上ポーズが入るような場合は考察の対象外とする、ということ。

筆者はこの考察の途中ではじめて、次のような、上記原則に反するように見える例を意識するようになった。

(11) Table Tennis Singles Women (卓球女子 シングルス)、Numbers シーズン2、岡山ぶどう祭 2008、テレビ せとうち、Lesson 12、Hurricane Hugo、鉄人 28号、Expo '70、大相撲 秋場所

これらは英語でも日本語でも、程度の差はあれ、後ろの名詞が前の名詞を修飾しているように思われる。例えば、Table Tennis Singles Women では、この名詞句全体が表わしているのは Women ではなく、あくまで Table Tennis Singles のほうであり、Table Tennis Singles の競技種目の中の Women に限定されたものを表わしている。したがって、意味の上では、Women ではなく、Table Tennis Singles のほうが主要部である、ということになる。これに対し、構造上原則的な修飾をさせれば、Women Table Tennis Singles となろうが、これも成立し、Table Tennis Singles Women とほぼ同じ意味であると思われる。それでは、それらの違いが何かということになる。原則に反する Table Tennis Singles Women では、何かが有標化 (marked) されているはずであるが、それは何であろうか。あるいは、上記の例すべてに共通するようなものが存在するのか、存在するとすればどういうものか、ということになる。そう考えると、これらはすべてタイトル (固有名詞) 的なものとして機能している、という特徴が見えてくる。これらはタイトル (固有名詞) を作るときにのみ許される特別な修飾構造と言えるのではないか、ということに気づく。

逆にいえば、意味的 (内容的) に考えて原則に反して前方修飾と考へなければならぬ、ということが、それをタイトル (固有名詞) と認識するための手段として使われている、とも言えるのではないか。それでは、「名詞＋名詞」の原則通りの後方修飾でもタイトルとしての用法があるのでは、ということが問題になるが、先ほど述べたように、Women Table Tennis Singles でもタイトルの使用は可能である。しかしながら、タイトルとしての使い方も可能であるが、タイトル専用というわけではない。各単語の始まりを大文字で表記すれば、そのように理解することも可能であるが、全体を小文字で表記する (women table tennis singles) と、タイトルらしさはなくなることが分かる。したがって、Table Tennis Singles Women という表現を聞いた見たりした場合、理解する側のストラテジーとしては、まず構造上、原則的に理解しようとするが、それではうまくいかず、次に構造上の原則に反する前方修飾の理解を試みる、ということになる。その結果、タイトルという特別の使い方であると理解することになるのではないか。

## マトリックス項目指定

前置された名詞が後置された名詞を修飾するのが、日本語、英語で共通の構造上及び意味上の原則であるが、直前の例から、名詞が意味的に前の名詞を修飾する用法が許容されるのではないか、ということになる。それは全体がタイトルのような固有名詞的なものとして使用される場合ということで一括りにできるのではないか。うがった言い方をすれば、通常の論理と違うということが、タイトル (固有名詞) であることを明示する、という表現方法になっていると言えるのではないか、というのが直前の考察の結果である。問題はこの解釈の奥にさらに何か原理的なものが働いているのではないか、ということである。そこを突き止めたわけではない。

この節の例(11)では、前の名詞が大体主要部に見えそうでもある。だから、後方からの修飾だと筆者は当初考えたわけであるが、それは大きな間違いではなかろう。後ろの名詞は副詞として機能し、前の名詞を修飾しているとも考えられるぐらいだからである。しかし、通常の名詞による後方修飾のようなものと比較した場合、そのような意味で後ろの名詞が前の名詞を修飾しているようには見えない。修飾の度合いが弱いというか、今の場合、前後の名詞の独立性が高いように感じられる。そのように考えると、その意味での究極のものが次のようなものになるのではなかろうか。

(12) 「現在 北緯33度、東経135度にある台風は・・・」

これら2つの下線を引いた箇所は一緒になって名詞句を形成していると考えられることもでき、その中では名詞どうしは完全に独立していて、お互いに主従の関係を見出すことは全く無理である。別の捉え方をすれば、主要部がどちらとも決められない、ということである。この例と前の例とを考え合せると、筆者はこういっ

たものは2次元のマトリックスの中で、その中のクロスしている項目を指定することになっている、という考えに至った。最後の例では、地図の縦方向に北緯の数値が順に並び、横軸に東経の数値が並んでいるようなマトリックスの縦横の数値欄がクロスしている点が指示されているわけである。すると、これは明らかに言語の統語構造とはかけ離れたところにある、別レベルの認識の反映と見ることができるのではなからうか。最後の例では、2次元マトリックス（パラメータ）指定で平面上の1点が指定されているわけで、2つの独立した変数で1つの位置が指定されているだけで、個別言語の文法には全く依存しない認識手法である。その見方で前の例を振り返ると、例えば、Table Tennis Singles Womenでは、Table Tennis Singlesの中にはMenとWomenという2つの区分があり、またTable Tennis SinglesもTable Tennisの中の1区分であり、単純な2次元マトリックスではないが、原理は同じことで、マトリックス的な分類の中の1項目が指定されているわけである。他の例もそのようになっていくと認識し直すことができる。それでは、それはWomen Table Tennis Singlesとどう違うのか、その説明ができることが望ましいが、それら両表現はともに表す対象としては同じであるが、違いは話者の認識の問題ではなからうか。マトリックス的なものを念頭に置いて表現すればマトリックスとしての、従って分類名が組み合わさったタイトル的なものになり、そういう意識のない場合には通常統語法に従ったWomen Table Tennis Singlesとなる、ということである。その意味でTable Tennis Singles Womenは有標であり、タイトルとしての使用に向いている、と現象説明がうまくできることが分かる。したがって、Table Tennis Singles Womenは、「名詞＋名詞」の後方修飾に反していると見えたのであるが、そしてそれはある程度正しいと言えるのだが、通常の前方修飾とも言い難く、結論としてはマトリックスの中での項目指定、と見ることがもっとも適していることが分かった。それは狭い意味での統語構造をはみ出すものであり、マトリックスの想定の仕事では、一見、前の名詞、あるいは後の名詞が主要部として機能するように見えることにより、「大相撲 秋場所」など、どちらも主要部と言えそうなものが生じることも説明できる。

(13) 国体女子卓球 vs. 国体卓球女子（これらは筆者が考えたもの）

この例に見られる差は、分類の想定の仕事の違いに過ぎないと考えられる。そういう意味で、住所もマトリックス指定の例であると見ていいのではないか。日英語でその指定順序が逆になっているのも、マトリックス指定に文化的な影響が関与しているからと説明できる。イギリスでは、Queen Elizabethのような敬称(Queen)と名称(Elizabeth)の順序が歴史上、揺れる現象が生じたことも関連したものとしてみ出される。したがって、マトリックスの想定の仕事の強さを表すスケールが考えられる。

マトリックス意識の強度：低-----高

低い場合が例えば「汚染 物質」という名詞句で、全くマトリックス的なものは念頭に上らない。高い場合がTable Tennis Singles Womenである。「汚染 物質」という名詞句では、単純な後方修飾しか思いつかないから、マトリックス的な想定がなされているとはいえない。したがって

「名詞＋名詞」型の句で前方修飾のように見えるものは、修飾というよりマトリックスによる項目指定と考えられる。ただその（想定の仕事）程度には強弱がある。

というのが、筆者が考察を重ねた結果、最後にたどり着いた結論である。

このように構造とその意味を区別して「名詞＋名詞」構造を分析してきたが、(11)に示す「名詞＋名詞」型の名詞句については、構造上の原則(A)も意味上の原則(C)も成立していないマトリックス項目指定と呼べるような格別の構造という結論を下さざるを得ないものである、ということが分かった。

文の省略？（文型には依存しない！）

英語と日本語で、「名詞＋名詞」型の修飾構造は原則的に同じで、後方修飾である。前の例とは異なり、一方が動詞的な性格の名詞の場合はどうであろうか。まず、次の例を検討してみよう。

(14) 変更 部品 vs. 部品 変更、入荷 商品 vs. 商品 入荷

当日出荷（副詞）、「商品管理」（目的）、「事故発生」（主格）

少し考えつくだけでも名詞句の中に多くの関係が存在していることが分かる。たとえば「事故 発生」では、文の場合と同じように主語・動詞の意味関係である。「変更 部品」では、「部品を変更する」と文の形にしてみれば、「動詞＋目的語」の関係であるが、逆の順になっている。これらいずれの場合にも「名詞＋名詞」句は後方修飾になっている。また、名詞を前後で入れ替えても、主要部の違いから意味の違いが生じるけれども、すべて名詞句として意味を成すことから、文の中の他の余分な語を省いて行った結果「名詞＋名詞」型の名詞句が生じたというわけではないことが分かる。したがって、「名詞＋名詞」型の句に文の制約が働いているわけではなく、独自の構成論理を持っていると言えよう。英語においても、次の例から同じことが言える。

## (15) tax reduction vs. to reduce tax

したがって、日本語、英語ともに「名詞＋名詞」型の名詞句の内部構造は、動詞を中心とした文型とは無関係であり、従ってマトリックス項目指定という手法は言語一般に成立することが予想される。

Expo '70などは、後ろにある名詞が副詞として機能していると考えられないこともなさそうであるが、上のことから必ずしもそのように考える必要はない。後ろの名詞を副詞と見る、というのは現在の個別の言語の統語法の中でのつじつま合わせの説明であろう。単純にマトリックス項目指定と見ればよかろう。同じように、「卓球シングルス女子（卓球女子シングルス）」などでは、マトリックス項目指定になっており、“先頭で大カテゴリを示し、次いで、その中の項目指定を行うという提示方式”になっている、と見るのがよかろう。

同格

これまで同格用法と分類されてきた用法が、ここで述べているマトリックス項目指定と同じ原理に基づいているのかもしれないので、その点を考察してみる。

## ① The poet Burns

(①～⑤ : p.90: 英語学辞典)

これは、確かにその辞典の中で述べられているように、どちらが重心か決定し難い。類例としては

## ② The poet, Burns =

## ③ Burns the poet =

## ④ A poet, Burns 包含関係

## ⑤ Burns, a poet 包含関係

これらすべてで the (a) poet=Burns となるが、これら2つの名詞の間に修飾関係があるとは考えにくい。そしてそれら前後の名詞が表す対象は同一物を指示している点でマトリックス項目指定のものではないが、マトリックス項目指定の中のある1つの極限の場合であると考えられるのではないだろうか。項目が1つしかない、パラメータの値が1つしかない、という意味での極限という意味である。どちらの名詞が前に来るかはどのような状況のマトリックスを考えているかに対応する。ただ、それが微妙な違いの場合があることは容易に想像できる。違いは前後の名詞が表す対象が“=”とも考えられるし、Burnsは名前だけで、“≠”とも考えられるのに対し、Table Tennis Singles Womenでは、“=”の関係ではない点が異なる点である。しかし、表現方法（及びその原理）として同格とマトリックス項目指定は同じであるように筆者には思える。①～⑤の poet と Burns の順序の違いは、これらを含む文の中でのこの人物の導入の仕方の違いが反映されている。そのことは、マトリックス項目指定の典型と言える Table Tennis Singles Women において、この名詞句内の名詞の順序(Singles と Women)が、この句が使用される状況の中での分類の見方（マトリックスの想定の方）に関係しているのと同じである。

そうすると、この同格も言語の動詞を中心とした統語構造とは無関係な表現手法と言ってよかろう。どちらの名詞を先に出すかは、文という環境（文脈）の影響を受け、適切なほうの順序が選ばれる、ということである。

その他

語を文へとまとめている統語構造に縛られない構造と言え、単語自体の構成にも当てはまる。

## (16) 開港、測候、脱毛

これらの日本語の単語は、中国語の影響からか、非常にたくさん存在するが、「開」、「測」や「脱」などは他動性を持った動詞的性格の漢字であり、その後の名詞と「動詞＋目的語」の関係になるが、これらの語の主要部は、前の語「開」、「測」や「脱」にあり、これら「名詞＋名詞」の結合を見ると、第2節の(A)、(C)で述べた原則に反するものである。「測候」では、「天気を計測すること」の意味であるが、全体は計測することであり、逆順である。これらは1つの単語と見るべきもので、この中の論理は「名詞＋名詞」型の名詞句の論理とは異なっているということになり、英語の各単語の成り立ちに関しても「名詞＋名詞」の原則は適用されない、というように述べるのが一応できるだろう。この点は、筆者の今後の課題としておく。この点から、逆に、各言語で使われている単語というものが規定できる可能性もある。また、英語であれば、関係節による後方からの修飾などあり、それに影響されて「名詞＋名詞」の前方修飾が生じたものでもなかろう。また、日本語の大和言葉で「名詞＋名詞」の前方修飾の使われ方が今日まで続いてきているのかどうか、筆者の今後の課題としておく。

## [4] “A cup of coffee” 型

英語において、関係節や前置詞句による後方からの名詞の修飾では、文字通り“構造上”は後ろの節や句が前の名詞を修飾している。したがって、修飾語句を含めた名詞句全体の素性は前の名詞の素性を引き継ぐことになる。

(17) the leg of a table = leg, the leg of a table ≠ table

すると、筆者にとって a cup of coffee のようなものがずっと悩まされてきた形態である、ということになる。構造的には、後ろの前置詞句が前の名詞を修飾しているが、通常の意識においては、むしろその逆で、全体の素性としては coffee を引き継いでいるとあって差し支えないからである。このことは、英語という言語の中での一貫性という点で考えるとどうなのであろうか。この形は利用する際には、一面メリットではある。それは次の類似構造を見ると分かる。

(18) Many people vs. a lot of people

この例では、many と a lot of とが people を全体としては同じ位置で修飾している構造になっており、同じような意識で使用できるからである。many people など数量形容詞では前からの修飾が原則であるが、それと同じ順で a cup of なども使用できるからである。A cup of coffee では a cup of が many に相当し、many people と全く並行した構造と認識でき、実際、native もこのように理解していると思われる。ところが、問題は構造上そうっていない、というところが気になる点である。

(a) 主要部はどこか

よくよくこの形を考えてみると、A cup of coffee の中の cup が coffee の 1 カップ分を表していると考えられることができることに気づいた。日本語で「一杯のコーヒー」、「コーヒー一杯」が「コーヒー一杯分」と同じ意味であり、また、「一杯分のコーヒー」と順序が逆でも、そして「分」を付けても付けなくても全体は同じことを表していることに筆者は驚かされた。このことをほとんど意識したことがなかったからである。つまり cup をコーヒーをその中に入れた（ときの）分量であると考えれば、構造的には後の前置詞句が前の名詞を修飾していることに間違いはなく、また、後ろの名詞が主要部であるといってもこれも間違いとは言えなくなる。実際、この種のものでは考えてみれば、数量的な場合に限定されていることが分かる。そのように考えれば、cup と coffee とどちらが主要部か、ということを決めしがたく、どちらも主要部になりうるようになる。この点が of に絡んだ数量的限定の場合のユニークな特徴であることが浮かび上がってきた。次に日本語の別の例を挙げてみる。

(19) 「飯の大盛り」 = 「大盛りの飯」、「スイカの一切れ」 = 「一切れのスイカ」

しかし、例えば「岡山のぶどう」ではそのような逆転はあり得ない。数量的な限定になっていないからである。

他の例と合わせて考えてみれば、英語での圧倒的な数の「名詞+前置詞句」型の例では、原則通りの修飾がなされる。その中で数量を限定している場合の例では、of は部分を示す用法であり、従って他の前置詞のときにはこの現象は起こらないはずである（筆者の体験でもあり、予想でもある）。つまり、a lot of people のような例外的なものは、数量的な限定に限り使用される、ということである。A lot of people の例で主張を繰り返せば、lot は「割り当てられた部分」が原義で、people の部分集合と見ることもでき、lot と people とが数量の違いだけであると見ることができ、どちらも主要部であるとみなせるということである。日本語でも、「多くの人々」と「人々の多く」や、「50%の人々」と「人々の 50%」のように、どちらの部分も句全体に対する主要部になりうることを示している。

このような型に対して、筆者は意味の重心ということで説明を受けてきていて、その概念をただ使うだけで深く分析しないでできていた。この意味の重心が移動可能となる条件が、今回、数量指定ということである、ということがわかったわけである。そしてそれが可能となるのは、of 前置詞の前後が同じ対象を表していると理解できることがその原因である、ということが分かった。これに関連して辞書に次の例が挙げられている。

(20) A new type of dictionary = a dictionary of a new type = (口) a new type dictionary

新しいタイプの辞書 = 辞書で (の) 新しいタイプの = 新タイプ辞書 (下線と訳は筆者による)

A new type は数量の拡張（この場合、辞書の上位カテゴリになっている）と考えられ、「新しいタイプの辞書」と見なせるわけで、それで of の前後のものが同じものを表していることになり、逆転が可能になっていると考えられる。この場合、純粋な数量というわけではないが、いま述べた意味でやや拡張されているに過ぎないと考えられる。

All sorts and conditions of men, a sort of ... も同じような意味でやや拡張したものと理解できる。I hope to see

more of her. (また彼女にお目にかかりたいものです) も同じような拡張に過ぎないと筆者は考える。

このように考えると、「名詞+of+名詞」はすべて、構造上、後ろの前置詞句が前の名詞を修飾するという原則に則っていて、ofの意味としては部分の of の用法になっており、全体は後ろの名詞が表わす対象全体の中の部分集合になっている。数量限定の用法の場合、of の前後で同じものを指示していると見ることができるので、後ろの名詞が主要部に見えるのももつともであり、同時に構造上の原則も生きている、という一見矛盾する現象が生じているということになる。その結果、他の多くの数量形容詞と同じ順序での修飾という利点が生じている、とまとめることができる。

#### 同格の of の例

The city of London が同格の of の例である。これは city が London によって意味的に限定されているとは言い難く、同一物を念頭に置いた表現だからである。A cup of coffee 中の of を同格の of で理解することには無理があるが、それとの相違点を考えてみると、その点が異なるだけである。Of の前で表わされるものが全体であるか部分であるかの違いということである。それに呼応して of の意味が、同格と部分という当然の違いになって解釈されることになる！したがって、この場合も、どちらが主要部か、ということを決めたいことも、上で述べてきた a cup of coffee 型と全く同じであろう。つまり、この同格の用法も a cup of coffee 型の中の周辺部に位置する現象であり、それらがまとめられる可能性がある、ということである。

(21) There were six of them. vs. \*There were six them.

この of も同格の of と説明を受けてきたが、six them という語法は許されないで、それを補う表現方法になっていると考えられる。明らかに a cup of coffee 型の使い方であり、the city of London と同じである。代名詞に対する修飾が制限されていることを補う用法になっているというのは、“six people”と同じ語順になるからである。

以上の考察で注意しなければならない重要な点は、英語ではその中に使用される冠詞(類)も意味解釈に大きく関係している、ということである。この点はここでは触れないことにするが、1つだけそのことを示す例を次に挙げておく。下線部の前置詞句が前の名詞を修飾している原則的な場合である。

(22) The kind of alcoholic drink did not appear important.

(アルコール飲料の種類が重要であるようには見えなかった。)

#### [5] 日本語数量子

日本語でも、数量は特別な扱いを受けることが知られていて、多くの研究がなされてきている。それは数量子が修飾している名詞から離れて後置される場合などがあるからである。

(23) 「コーヒーを一杯ください」

通常の説明としては、「一杯」が副詞的に機能し、「コーヒー」、あるいは「ください」という部分を緩やかに意味的に修飾している、ということであろう。しかし、「りんご3つとみかん4つでは、どちらほしい」の場合、「3つ」などは副詞として「りんご」を前方修飾しているとも考えることも可能であるが、前節の考察に従えば、それぞれ「3つ分」「4つ分」とも考えられる。そうすると、前節の考察を踏襲して考えれば、英語も日本語も、数量指定になっているから特別な扱いが生まれる可能性を秘めていると言えるが、それは全体とその一部のどちらも主要部とみなせる、という点に起因するからである。文中で数量子は、数量子であることがすぐに認識され、数量指定以外の解釈がないため、その位置が比較的自由になっていると考えられる。英語での a cup of coffee の特殊性が、数量指定という点であることと共通性があり、ともに、同一物の数量だけを限定していることが特徴的である。

考えてみれば、「肉の新しいの」も同じ用法と考えられる。これは英語の名詞に対する関係節などの後置修飾と同じ構成順になり、日本語の“一貫した”修飾構造の不利な面を補っていると見ることができるだろう。

ここでのまとめは、日本語数量子の特別な振る舞いは日本語という言語に限定した用法であるが、数量というのは元の対象と同一物とも考え得るところにその用法の根拠があり、しかも限定された使用領域でのみ可能になっており、混乱を引き起こしているとは言えない。使用に便利であれば、あらゆる可能性を利用しようとする言語に対する態度の表れと考えられる。

#### [6] 結論

このように、名詞句を形成する構造において、その中の主要部がどの位置であるか揺れて見える現象があ

る。「名詞＋名詞」型の例外的に見えたものは、構造的にも意味的にも、その原則的な使用例とは区別されるべきもので、通常統語法と異なったマトリックス項目指定という、発想自体が異なるものと見るべきであろう。他方、a cup of coffee型の例では、「名詞＋of＋名詞」の原則的な使用例と構造上は同一であるが、前後の名詞が同一物を指示していると見ることができることから、意味的には「名詞＋of＋名詞」型の原則に反する例になっていることが分かった。しかもこの場合も、英語と日本とがともに同じような振る舞いをすることから、これらは言語一般に成立する事柄であるように思われる。

#### 参考文献

- 1) C.T. Onions “An Advanced English Syntax” (安藤 貞雄訳) 文建書房 1969
- 2) 新英語学事典 研究社 1982
- 3) リーダーズ英和辞典 第2版 研究社



## Exceptional Modifications against Nouns

Makoto KOMOTO

*Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,  
Okayama University of Science  
Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan*

(Received September 29, 2008; accepted November 7, 2008)

The following two types of noun phrases in English and their Japanese corresponding noun phrases are investigated here from the perspective of structure and meaning.

(1) Expo '70 (Noun + Noun)

(2) A cup of coffee (Noun + of + Noun)

The general rules in constructing these phrases are that the first noun modifies the second noun in (1) and the prepositional phrase “of coffee” modifies the first noun in (2) in the sense of both structure and meaning, but these two examples look exceptional against the rules. I propose to understand against (1) that this type of example can be understood to come from specifying a cell in a matrix of two variables (designated by the first and second nouns) in mind and is used as a sort of “title”. In this sense, this example is exceptional. In (2), I have noticed that “a cup” can be understood to mean “a portion of coffee (to be) contained in a cup.” This fact makes it possible that “a cup of” can function as a modification of “coffee” as “much” in “much coffee.”

The conclusion is that these two types of examples sound against the construction rules, but there are the above mentioned reasons or bases to allow for these exceptional uses.